講演

研究者コミュニケーションを根本から変える文書管理の変革

Mendeley CEOが語る学術情報流通の将来

Revolution of the reference management tool and its huge potential power to scholarly communications

The future of scholarly communications described by CEO of Mendeley Ltd.

ヘニング, ビクトール¹

HENNING, Victor¹

1 Mendeley社 共同創設者, CEO

1 Co-founder and CEO, Mendeley Ltd.

情報管理 55(4), 253-261, doi: 10.1241/johokanri.55.253 (<http://dx.doi.org/10.1241/johokanri.55.253>)

1. Mendeleyのはじまり

私たちがMendeleyの開発に着手した理由は、私たち自身が研究者だったからです。

当時、Mendeleyの創立者である私、Jan, Paulの3人は博士課程の学生でした。研究に必要な文献が無秩序かつ膨大にある中で、それらを効率よく整理したり、文献間の関連性を見いだしたり、自分が読んだ文献に対するアイデア、考察などを忘れずにとっておくよい方法がないという問題を抱えていました。例えば、当時私が使用していた文献管理ツールでは、データ入力を手作業で行わなければならず、追跡管理も自分で行う必要があり、全文検索もできませんでした。

そこで、私たちは、音楽の世界におけるiTunesのように、PDFファイルをインポートするとすべての研究論文が自動的に整理され、自分に必要な情報が抽出されるようなソフトウェアを学術研究の世界で作ることを考えました。Mendeleyはこのような経緯、アイデアから出発して、試作品開発、製品化に至ったわけです。

2. Mendeleyの概要

Mendeleyは無料のデスクトップソフトウェアです(図1)。

「mendeley.com」にアクセスして、Windows, Mac, Linux用のソフトウェアをダウンロードし、コ

本稿は、2011年12月8日、文部科学省科学技術政策研究所で開催された講演「研究者コミュニケーションを根本から変える文書管理の変革」の和訳短縮記事であり、主催者ならびに講演者のご厚意により、『情報管理』編集事務局で講演内容を和訳し短縮、編集したものである。編集にあたっては講演会を主宰した同研究所客員研究官林和弘氏のご協力を得た。元の講演内容(英文)は、科学技術政策研究所講演録 286号(2012年3月発行)に収載されている。

図1 Mendeley (Recommended articlesをハイライトしている)

ンピューターにインストールするだけで、無料で使えます。iPhoneアプリケーションやiPadアプリケーション、iTunes App Storeも用意されています。

ソフトウェアをインストールしたら、PDFが保存されているハードドライブのフォルダをポイントするか、複数のPDF文書をソフトウェアにドラッグアンドドロップします。すると文献の著者名や標題、雑誌名、巻号、ページなどすべての情報とPDFのコレクションが自動的に構造データベースに格納され、そのデータベースの中で、フィルター処理をしたり検索や並べ替えを行ったりすることができます。また、PDFを読んで、注釈を付けることも可能です。Mendeleyのソフトウェアに入れられたすべての情報はクラウドにアップロードされ、再利用できるようになります。

3. Mendeleyの機能と特長

Mendeleyでは「ライブラリ」というフォルダに文書を入れて整理します。ライブラリに入れた文書は、著者名、標題、出版年、雑誌名、それにこの文書をライブラリに追加した日時で並べ替えることが可能です。追加した最新の文書についても、追跡管理することができます。

また、自分がそれぞれの文書に与えたキーワード

でこれらの文書をフィルターすることもでき、さらに、文書から著者のキーワードを自動的に抽出したり、すべての文献から全文検索を行うこともできます。例えば「emotion (感情)」と入力すると、そのキーワードですべての文書が検索され、見つかった場所がハイライト表示されるようになっています。紙に印刷されているような形式で文献を読みたいと思ったら、全画面表示に切り替えると、デジタルメモがハイライト表示され、追加されます。

ライブラリに登録した文献やメモ・注釈は、Mendeleyでグループを作るだけで、共同研究者など他の人たちと共有することができます。グループを作ると、そのグループ内で行われているすべての研究活動がMendeleyに表示されるため、参加者はグループメンバーの詳細や研究内容を確認し、研究内容についてディスカッションすることができるのです。MendeleyにはWebサイトもあり、デスクトップ版と同様に、リサーチネットワークから多数の更新情報を受け取ることができます。デスクトップ版の「My Publications」というフォルダに論文などの資料を入れると、自動的にWebサイトの「My Publications」の方にも表示され、ここから自分の文書を他の人々に向けて公開することができます。なお、全文PDFを一般公開する権利がない場合は、書誌データだけを表示しPDFは非表示にすることもできます。

Mendeleyのユーザーには無料のプロフィールが付与されるため、それを使ってMendeleyや他のWebサイトのメンバーと情報交換をすることができます。

その他、自分の論文に対する読者数やダウンロード数に関する統計情報を確認したり、これまでに獲得した賞や助成金の情報、経歴、自分がメンバーとして所属している公開グループなどを表示したりすることもできます。さらに、Mendeleyには埋め込み型のプロフィールウィジェットが用意されており、Webサイトに論文のリストやプロフィールを掲載しておきたい場合には、一度情報を入力してプロフィー

ルウィジェットを構成しておけば、そのコードをコピーして何度でも再利用することができます。

Mendeleyでは各研究分野のユーザーが共同で抄録あるいは概要を書き、グループを構成しています。Webサイトにある「Groups」タブをクリックして自分の専門分野を選ぶと、その分野で現在人気のある主題やグループが確認できます。また、任意の論文をクリックすれば、どの論文がどのグループに属しているかということや、抄録や著者キーワード、出版社へのリンクなどその記事についての詳しい情報も確認することが可能です。さらに、IPアドレスから特定の機関に属するメンバーかどうかを判断して自動的にリゾルバを設定することもできますし、手作業でリゾルバを設定することも可能です。

さらに、それぞれの文献の読者層に関する統計によって、その文献のMendeleyにおける読者数や読者の専門分野、研究上の立場、出身国などを把握したり、その文献をライブラリに追加した人を突き止めることもできます。そして、「preview」をクリックすると、文献の最初の2ページについては無料で読むことができます。

このように、Mendeleyは、特定の研究分野や人々に関する新しい知識を手に入れられるという文献管理の域を超える特長を持っています。

「Reference」タブをクリックすると、引用された参考文献が自動的に抽出され、引用ごとに本文の中での引用の文脈が表示できるようになっていて、この引用について著者が何と述べているかを確認することもできます。そしてもちろん、その引用文献がMendeleyにあれば、プレビューや抄録を読んだり、関連性のある研究を見つけたりすることができます。ちょうどAmazonが、「この本を読んだ人はこの本も読んでいます」と教えてくれるように、Mendeleyでは自動的に抽出された記事からキーワードを見つけ、さらにコラボレーション用のフィルターも見つけてくれるのです。

もうすぐリリース予定の新機能を簡単に2つ紹介し

ます。1つ目は「QuickSend」といって、今までより簡単に他の人と文書を共有できるようにする機能です。これを使うと連絡先の追加やeメールのアドレス帳のインポートができます。追加した連絡先に共有したい文書をドラッグアンドドロップすると、相手との文書の共有が簡単にできます。

2つ目の新機能は「Mendeley Suggest」といいます。これは、あなたのライブラリに入っている文献を調べて、関連性がある文書やあなたが興味を持ちそうな文献を教えてくれる機能です。

4. Mendeleyの設立

Mendeleyの開発に着手した理由は、冒頭で申し上げた通りです。私たちは博士課程が終わりに近づくにつれて、研究論文の自動的な整理や必要な情報を抽出するためのソフトウェアが学術研究の世界にないという問題に気づき、何か対策を講じて会社でも興そうじゃないかと考えるようになったのです。博士課程の貧乏学生3人が会社を興すことは多大なリスクを負うことでした。しかし、私たちはリファレンスマネジメントを行うだけでなく、学術界全体にとって利益になることを何かしたい、そして他の人々も使うことができる学術データを使って何かしたいという強い熱意を抱いていたため、会社を興すことに挑戦したのです。こうしてMendeleyという会社が設立されました。

私たちはまず、ドイツの大規模なコンピューター見本市「CeBIT」に赴き、ベラルーシの外注会社にMendeleyの試作品作製を依頼しました。そして試作品ができた2008年の夏には、投資家のDr. Stefan Glänzerにコンタクトを取りました。Stefan Glänzerは経済学博士で、Janと私のビジネススクールの客員講師でもあり、ヨーロッパで最も成功した起業家の1人です。また、ドイツ版のeBayであるオークションサイト、Ricardoを立ち上げた人物としても広く知られています。彼はRicardoを2億5,700万ドルで売却した

図2 Mendeleyの最初の公式写真

後にロンドンへ移り、Last.fmという新興企業の最初の投資家兼会長になりました。

Last.fmは世界最大の音楽サイトに成長し、アメリカのCBS社に2億8,000万ドルで売却されました。私たちがStefanにコンタクトを取ったとき、StefanはLast.fmを売却しようとしているところで、新しいチャレンジを探していました。そして私たちが解決しようとしている問題を直ちに理解し、そのアイデアに熱意を示してくれました。Last.fmではユーザーがiPodやiPhone、iTunesで聴いた音楽を追跡管理して、あなたが気に入るかもしれない音楽を配信してくれます。私たちは、学術研究版のLast.fm、すなわち学術情報を管理してデータを集約し、ユーザーにお勧めのペーパーがあれば推薦し、最終的には学術コンテンツにアクセスできるような支援をしたいとStefanに言いました。

ロンドンでこの写真（図2）が撮影される5分前に、Stefanが共同創業者兼最初の投資家になることが決まりました。つまり、この写真はMendeleyの最初の公式写真です。

5. Mendeleyの構想

ヨーロッパで一番の投資家が参加してくれるなどすべてが順調に行く時もあれば、すべてのことがう

まくいかない時もありました。しかし私たちには、自分たちを駆り立てる構想がありました。

2年前のTED ConferenceでTim Berners-Leeが「私たちは常に、人間社会が直面する巨大な課題を意識しています。その課題は、がんを完治させることであったり、アルツハイマーの脳を理解することだったりします。しかしこの知識はすべて科学者のコンピュータの中に閉じ込められており、現在は共有されていません。私たちはこれを解き放ち、このような大きな問題に立ち向かえるようにしなければなりません」と言いました。私たちは、Mendeleyが成功すれば、科学者がすべての情報を解放し、共有できるようになり、それによって人類ががんやアルツハイマーなどの大きな問題に立ち向かうのを支援することができると思いました。私たちは、個人が他の人々と簡単にドキュメントを共有でき、それが同時に全員のメリットになり、学術系コミュニティも研究に役立つデータを手に入れる、そんな状況を作りたかったのです。これが私たちの推進力であり、科学を前進させ、Tim Berners-Leeの言う「人類を前進させることができる」構想です。

私たちは前進し続け、2009年にはPlugg「本年度新興企業賞」とTechCrunchの「最優秀ソーシャルイノベーション賞」を、2010年にはTelegraphが選出する「ヨーロッパ最優秀教育新興企業賞」を受賞しました。また、2011年はSunday TimesとMicrosoftが主催するTech Track 100にも選ばれています。

現在、Mendeleyは社員が35人になり、ロンドンとニューヨークにオフィスを設けています。また、Skypeの創業者やLast.fmの創業者、またWarner Musicの裏舞台で働く一部の人々から出資を受けているほか、英国情報システム合同委員会（Joint Information Systems Committee: JISC）、英国技術戦略委員会（Technology Strategy Board）などから研究資金を得ています。

6. 世界最大のリサーチコラボレーションプラットフォーム

ここからは、学術コミュニケーションの将来についてお話ししたいと思います。

皆さんの中に図書館員の方がいらしたら、興味を持っていただけるかもしれませんが、Mendeleyは2012年、オランダにある世界最大級の学術雑誌取扱代理店Swets社と共同で製品を発表する予定です。共同製品は、図書館が購読しているコンテンツの利用状況をこのようなダッシュボード（図3）で確認するためのものです。購読している雑誌の一覧をアップロードすると、各刊行物の利用状況や、図書館利用

図3 コンテンツの利用状況を可視化

図4 Mendeley文献数の増加（縦軸は文献数，横軸は年月日）

者に人気のある文献などを調べることができます。

現在Mendeleyは、130万人以上のユーザーを持ち、登録ユーザー数が多い機関には、Cambridge, MIT, Stanford, Imperialなどが名を連ねる、世界最大のリサーチコラボレーションプラットフォームとなりました。この状況は、Mendeleyアドバイザープログラムがなければおそらく成し得ませんでした。Mendeleyアドバイザーは、私たちと共通の構想を分かち合い、Mendeleyを広めたいと申し出てくれた大学研究員、博士課程の学生、ポスドク、教授などです。私たちは世界中に815名のMendeleyアドバイザーのネットワークを持っています。

Mendeleyはわずか3年ほどで、世界最大のリサーチデータベースになりました。現在1億3,000万件（クラウドソースによる重複を除くと約5,000万件）ものの文献がユーザーによってアップロードされています。現在、1日約50万件の文献が追加されており、2011年12月末までには、約1億4,500万件になるはずです（図4）。

Mendeleyで得られるすべての情報は、オープンAPIから無料で入手できます。アドレスは“dev.mendeley.com.”です。Creative Commonsのライセンスのもとに提供されていますので、営利、非営利を問わず、自由にデータを使用し、再利用していただけます。唯一守ってほしいことは、データの出典がCreative Commonsに帰属することを明記することだけです。

7. Mendeley/PLoS Binary Battle：アプリケーションの開発

オープンAPIに関して、MendeleyとPLoS（Public Library of Science）が共催したアプリ開発コンテスト“Binary Battle”が先日決着しました。このコンテストは、MendeleyとPLoSのオープンAPIを使ったアプリケーションの開発を奨励するために開催されました。

審査員は「Web 2.0」という言葉を生み出したO'Reilly PublishingのTim O'Reillyや、Amazon最高技術責任者のWerner Vogels、Thomson Reuters最高技術責任者James Powellといった素晴らしい方々が務めてくれました。

このコンテストで作成されたアプリケーションのいくつかは、学術的インパクトを可視化し、測定するものでした。例えばReaderMeterは、著者名を入力すると、その著者による著作一覧が、文献の読者数順に表示され、その人の共同執筆者の一覧がMendeley APIから取り出されます。そしてその人の研究のインパクトのメトリクスが計算されます。そして、論文ごとに、読者の出身地や読者の学問分野などを確認することができます。

Collabgraphは、ライブラリ内の文献の関係を共同執筆者別に視覚化したものです。

Kleenkは、Mendeleyのライブラリをインポートし、ライブラリ内の異なる文献の間にセマンティックなリンクを作成できるツールで、自分が取り組んでいる研究が相互にどのような関連を持つかを可視化することができます。

PaperCriticは、オープンピアレビュー用のツールです。現在は、既に出版済みの文献を対象としているので、Mendeleyデータベースからどれでも文献を取り出して、独創性や論証について査読コメントを書いたり、論文を評価したりできるほか、誰かがTwitterでその論文について言及しているとそれを自動的に追跡する機能も持っています。

「Binary Battle」の最優秀賞を受賞したopenSNP (図5) は、23andMEやdeCODEmeのユーザー向けサービスです。これは個人向けのゲノム解析サービスで、ゲノムの配列を作り、ユーザーの表現型と遺伝子型、それに遺伝形質についての情報を教えてくれます。openSNPでは、自分と似た遺伝子や遺伝子発現を持っている人々を見つけられるように、生の遺伝子データをアップロードすることを奨励しています。この表現型や遺伝形質に関する情報は、自動

図5 openSNP (<http://opensnp.org/>)

的にMendeleyやPLoSの研究論文で補強されるので、ユーザーは自分の遺伝子について最新の研究結果がわかるし、研究者はユーザーに連絡して病歴の詳細を調べ、ユーザーに質問をしたりユーザーの生データをダウンロードしたりすることができます。

審査員はこれこそがTim Berners-Leeが話していた、生の科学データをコミュニティに提供することによって、新しい方法でデータを共有したり、データを文学のように他の情報で豊かにしたりすることだ、と感じたようです。

8.「科学出版がまだ崩壊していないのはなぜか」

Mendeleyが目指していることは、文献の相互関連性についての豊富なデータセットを作ることです。例えば、この文献は別の文献を立証しているとか、この文献は別の文書に反論しているとか、同じ方法が使用されている、などのリンクが既に作成されています。そこで、意味的な注釈と生のデータをクラウドソーシングして、世界規模の科学の粒子のようなものを作ろうとしているわけです。

これは学術コミュニケーションの将来にとって、何を意味するのでしょうか？

以前、「Scholarly Kitchen」という学術出版業界に

ついでにブログに「科学出版がまだ崩壊していないのはなぜか」という投稿がなされ、多くの議論を巻き起こしたことをご存じの方もいらっしゃるかもしれません。投稿者のMichael Clarkeは、「Tim Berners-Leeが1991年にWebを創造したとき、その狙いは科学コミュニケーションを促進させ、科学研究を広めることだった。言い方を変えるなら、Webは最初から科学出版を崩壊させるために設計されたのである。しかし科学出版は崩壊しなかった。これまでに音楽や映画、電気通信やポルノなど、ほとんどあらゆるものが崩壊したが、出版は崩壊しなかった。これはなぜだろうか」という問題提起をしました。

この投稿の背景には、現在の学術出版界で起きている最大の課題、いわゆる「シリアルズ・クライシス」と「オープンアクセス」があります。

「シリアルズ・クライシス」というのは、逐次刊行物の購読料金が上がり続ける一方で、図書館の予算は凍結するか、縮小するケースが多くなっている状況をいいます。

「オープンアクセス」、つまり科学の学術情報を誰にでも無料公開することについては、既にライフサイエンスの研究において適用され始めていることを皆さんご存知かと思います。これを他の全分野にも拡大することは、科学にとって素晴らしいことだと思うのですが、過去分の論文も販売して事業を成り立たせている多くの出版社にとっては、非常に恐ろしいことになりかねません。

ブログ投稿者のMichael Clarkeは、「科学出版がまだ崩壊していない」理由として次の3つの点を挙げています（図6）。

第1に、ジャーナルでは査読というコンテンツの「検証」が行われますが、これはジャーナル特有の機能であること、第2に、ジャーナルにはユーザーが関心を持っているものやユーザーが読みたいと思われる可能性があるものを紹介するなどの「ふるい分け」の作用があり、コンテンツの発見が促進されているということ、第3に、ジャーナルへの掲載は「権威付

図6 科学出版がまだ崩壊していない3つの理由

け」、つまり著者にとっては名声を意味するということです。

9. 学術コミュニケーションの将来

さて、この科学出版を支えるジャーナルの「検証」、「ふるい分け」、「権威付け」という3つの機能がMendeleyなどのツールによって提供されるようになったらどうでしょうか？ これは実際に現在起きていることだと思います。

まず「検証」から見ていきましょう。現在はPaperCriticなどのツールによって出版後の査読が行われています。これは既に出版されたコンテンツのみが対象ですが、物理学分野のプレプリントリポジトリであるarXivや、機関リポジトリがあって、執筆中の論文を保存するとアーカイブに索引が付けられるような世界を想像することはそんなに難しいことではないと思いますし、既に機関リポジトリとの統合についても作業が進められています。

Mendeleyでは今後ますますワーキングペーパーやフリーのピアレビューコンテンツが増えていくと思います。また既にMendeleyを使用して注釈を作成したり、自分用にコンテンツのミニレビューを書き込んだりしている人もいます。これらのレビューがもっとオープンに共有されるようになれば、大学研究者

として文献を見たときに、他の人々がその論文についてどのようなことを言っているのかを知ることができます。

PaperCriticのような出版後の査読ツールからクラウドソースの出版前査読に移行することは、それほど難しいことではないと思うのです。すなわち、「検証」は外部機関が行うことも可能であると考えられます。

第2の機能として「ふるい分け」がありました。私は、これは最も簡単に外部機関が行えることだと思っています。音楽の世界における「ふるい分け」はこれまでラジオ局やアルバムを制作するレコードレーベルが行ってきました。しかしiTunesの登場により、人々は自分が聴くものを自分で選びたいと思うようになりました。アルバムは重要な単位ではなくなり、個々の曲が重要視され、米国のPandoraやLast.fmのような音楽の推薦エンジンが、新しい曲を見つける最良の方法と言っていいほどになりました。また、Facebookで多くの音楽を共有し、お気に入りの曲を友人に伝えるという、ソーシャルディスカバリーも広がりました。

推薦アルゴリズムによるこのような発見は、当たり前のことになりつつあります。Mendeleyにおいては、Mendeley Suggestが近日公開予定です。

Mendeleyでは、アルゴリズムだけでなく他の人々やグループを見つけることができます。MendeleyのWebサイトには、手作業でまとめた10万を超える参考文献目録が掲載されており、1つのトピックの重要な研究についても手作業でまとめたリストのグループがあります。今ではあらゆる研究者がコンテンツの管理者となり、情報を集めてまとめ、ちょうど雑誌編集者がするように、「これが特定の主題について私がまとめた重要な文献の一覧です」と言うことができるのです。

この方法により、第2のふるい分け機能は間違いなく崩壊すると私は思っています。

最後に、「権威付け」の機能がありますが、おそらく

これが外部機関で行う際に最も難しいものだと思います。現在、『Science』や『Nature』など、100年以上も前に確立されたブランドがあり、それらのジャーナルに掲載されることで、研究者には大きな名声がもたらされます。これが一夜にしてなくなることは考えにくいでしょう。

しかし驚くべきことに、先に述べたアプリ開発コンテスト“Binary Battle”では、この「権威付け」に関するアプリケーションが作成されました。それは学術界でのインパクトや影響を測定しようと試みた3種類の異なるアプリケーションでした。1つは先ほど紹介したReaderMeterで、個人の影響やインパクトに関するものです。2つ目はTotal-Impactといって、インパクトを追跡したい文献のグループを定義することができるアプリケーションです。Total-Impactは、引用回数、PLoSでの記事のダウンロード回数、Twitterで言及された回数、Mendeleyでの読者数も追跡するなど、何百という方法で名声をとらえようとしているので、学術コミュニティに対して影響力があるかどうかを測定する別の方法になり得ると思います。3つ目はScienceCardと呼ばれるもので、ORCIDの代表が手がけているプロジェクトです。ORCIDというのが著者を識別するための新しいイニシアチブであることは皆さんもご存知かと思います。ScienceCardを開発したMartin Fennerは、ScienceCardが個々の研究者が、ScopusまたはCrossRefでの引用回数はどのような状況か、Mendeleyやその他のサービスの読者層はどのようなものかを確認できるものになることを願っていると言っていました。今後もこのようなツールが数多く登場してくると思われます。このように、今後10年以内には確実に、『Science』や『Nature』などのブランドに代わって、科学における個人の影響力を評価する別の手段を提供できるようになる可能性があると思います。

10. 科学の「顔」を変えていく

以上のような状況の中、出版社が研究活動と学術コミュニケーションの将来にとって意義ある存在となるためには、DeepDyve社のようにコンテンツを個人に届けるための新しい流通経路を確立することや、コンテンツ自体を超えた付加価値を提供することが対応策として考えられると思います。

流通経路については、Webやデスクトップソフトウェア、モバイルデバイスなど、複数の選択肢があると思います。また、購読モデルも論文のダウンロード、レンタル、制限付き購読、制限なし購読などさまざまなものが考えられます。

私は、自分の経験からも、多くの図書館が採用している雑誌の一括定期購読モデルは非常に効率が悪いと思っています。ユーザー主導による収集の方が、ユーザーにとっても効率的で、出版社にとっても、同等もしくはそれ以上の収益が得られる可能性があると考えています。そしてコンテンツを加えるという点においては、その文献がどこでどのように利用されているか、追加分析、追加のデータセット、追加の統計情報を提供することができると思います。

また、出版後の査読を行っている会社はMendeleyだけではありません。出版後の査読を業務の中心としてクラウドソースを使っているF1000（ファカルティ・サウザンド）という会社があります。ElsevierでもSciVerseというアプリケーションプラットフォームに多額のお金を投資し、Elsevier論文コンテンツ上にアプリケーションを搭載させ解析ができるようにしています。おそらく将来的にはMendeleyのアプ

リケーションプラットフォームのライバルになると思っています。

そして、SkypeやFacebook、Google、AppleなどWebで大成功を収めているケースを見ると、すべての会社に共通しているのは、どこも非常にシンプルで魅力的なユーザーインターフェイスを備えているということです。率直に言って、研究者向けのインターフェイスの多くはひどいものなので、ここは研究者が昔から全然期待していない部分なのではないかと思います。

今後、出版社や図書館が本当に付加価値を提供していくための1つの方法は、ユーザーがリサーチコンテンツを気持ちよく楽しく利用できる、より良いユーザー体験を提供することだと思うのです。これまでにMendeleyがやや特別な評価を受けているのは、私たちがそれをすべて行っているからであり、だからこそAmazonのCTOであるWerner Vogelsから——これは当社についての評価の中でも私が特に気に入っている名言の1つですが——Mendeleyは科学の「顔」を変えることができると確信している、と言ってもらえたのだと思います。

Dr. Victor HENNING 略歴

文献管理とSNSが融合したツールMendeleyのCEOで、2009年の立ち上げから当ツールの開発運営に携わり、今や100万人を超えるユーザーと1億3,000万の文献を登録する世界でも類を見ないクラウド型の研究情報プラットフォームに仕立て上げた。現在は英国王立芸術協会のフェローを務める。また、心理学の専攻でBauhaus-University of Weimarの学位を有し、映画や音楽業界での職務経験を持つなど多彩な経歴を持つ。